

# 『夜寝覚物語』の改作方法について

## —改作の構想と『狭衣物語』—

—はじめに

平安時代後期に成立した『夜の寝覚』（以降これを原作と呼ぶ）は、『無名草子』『拾遺百番歌合』『風葉和歌集』などの資料から、平安時代末から鎌倉時代中期にかけてよく読まれていたらしいことがわかる。絵巻が作られたり、物語中の和歌の抜書が作られていたこともその傍証となろう。<sup>(1)</sup>

ところで、そのように人気の高かった『夜の寝覚』には改作本があり、明治時代、藤岡作太郎氏によつて紹介され、中村秋香氏旧蔵ゆえ中村本と呼ばれている。それは全五巻の完本であるが誤脱の多いものであり、金子武雄氏が古典文庫二巻に翻刻されている。<sup>(3)</sup> また中村本とは別に、三条家旧蔵の巻一から巻三までの有欠本も伝わっており、こちらの方は中村本より善本

でありほぼ同一本文である。

その改作本の成立は、鎌倉時代後期から室町時代にかけての頃とされるが、<sup>(4)</sup>『無名草子』の記述からも推測されるように、平安時代末から鎌倉時代にかけて物語の改作はよく行われていたらしい。例えば、現存する『とりかへばや』『海人の刈藻』『忍び音』は改作されたものであるとされ、『住吉物語』や『狭衣物語』には多くの異本があり、さらに『源氏物語』にはいくつか梗概本が作られているが、これも改作の一形態と考えられる。『夜の寝覚』の改作本が作られたのも、こういった時代の気運と無関係ではなかったろう。

ところで、『寝覚』の改作本は、原作を短縮梗概化しているとは言え、単純に原作の梗概本と位置づけてしまうことは適切ではない。というのも、話の筋は原作のものを使いながらも、

小田 成江

物語の構造とテーマにおいては、原作と大きな相違をみせているからである。つまり、構造においては、冒頭部にこの話がどういう経緯で語られることになったかを示す「語りの場」を設定する序を置き、それと対応する跋を物語の結語とし、その序跋の枠組みの中に、原作を短縮化した物語をはめ込んだというものになっている。原作にも序に該当する冒頭部はあるが、それは物語のテーマを簡単に提示しているだけで、「語りの場」の設定といったものではない。また、原作の跋については、現存の巻五の最後をそれに該当させてよいものかどうか疑問であるし、巻五以降のいわゆる末尾欠巻部の最後に該当箇所があったのかどうか不明である。いづれにせよ原作では改作本ほど冒頭部の序に対応する跋は明瞭ではないと思われる。

次にテーマについては、原作の「心尽くしなる寢覚の御仲らひ」を描くということから、「夢はむなしからず」ということの例証へと変化し、それに伴って物語の結末も、原作の悲劇的なものが、大団円なものへと変化している。つまり物語の筋は似たようなものであってもその目指すところは大きく異なっており、結末の相違は物語の本質的相違といってもいいように思われる。<sup>(6)</sup>

このように原作の大きな改変を行ったのが、改作『寢覚』で

あり、先に挙げた改作本や梗概本があくまでも元の物語の構造やテーマ内での改変であつたのと比べると大きな隔たりがあるように思われる。

しかし、平安時代末から鎌倉、室町時代にかけて輩出した多くの擬古物語と同じように、この改作本にも『源氏物語』や『狭衣物語』の影響がみられ、特に『狭衣物語』の影響は著しく、それは単に、詞章や場面や和歌を取り込んだというだけでなく、<sup>(7)</sup>改作の構想にまで影響を及ぼし、原作を改作する要因として働いたのではないかと考えられる。

本稿は、『狭衣物語』が原作『夜の寢覚』を改作する要因として働き、改作する際の構想に大きく影響を及ぼしているということを論じたものである。なお、紙面の都合上、今回は改作要因についてまでを論じた前半部のみを掲載し、後半部「五改作本の構想に影響した『狭衣物語』」「六 おわりに」は次号に掲載する予定である。

## 二 『狭衣物語』の影響についての従来の指摘

鈴木一雄氏は、神宮文庫本『よはのねざめ』を検討し、改作『寢覚』に『狭衣物語』の影響があることを指摘し、その成立時期

推定の一助とした。<sup>(8)</sup>その影響とは次の二点である。

i 改作本の序の起筆部が『和漢朗詠集』所収の源相規の詩句を踏まえたものである点は、起筆部に『和漢朗詠集』所収の白居易の詩句を踏まえた表現を持つ『狭衣物語』の影響であろう。<sup>(9)</sup>漢詩を踏まえての冒頭は、鎌倉時代以降の『狭衣物語』尊重の風と共に擬古語冒頭の一類型となったからである。

ii 原作の中間欠巻部にあたるが、改作『寝覚』に、男主人公が女主人公の兄に恋に悩む心情を訴える場面があり、その時の言葉の中に次のような表現がある。<sup>(10)</sup>(傍線は私が施した。)

光源氏は藤波に沈み、狭衣の大將は道芝の露にしをれ、五郎中將はすみかをさだめず国々にありき給ひけり。これみなつたなき心にあらず。この道には、かしこからぬ習ひなれば、おぼし許し給へ。(巻二・四一九頁)

傍線部「光源氏は…」は、『源氏物語』の主人公光源氏が、継母藤壺への恋に悩んだことを言い、「狭衣の大將は…」は、『狭衣物語』の主人公狭衣が、飛鳥井女君への恋に悩んだことを言い、「五郎中將は…」は、『伊勢物語』の主人公業平が東下りをしたことを言っている。「狭衣の大將は…」は、

『狭衣物語』尊重の風が盛んで特に飛鳥井女君の人氣があった鎌倉時代以降の補入であろう。<sup>(11)</sup>

以上、二点「狭衣物語」の影響が見られることから、改作本の成立は『狭衣物語』より後であるとした。このように、鈴木氏は『狭衣物語』の影響があるという点を改作本の成立時期を推定するための手掛りとして使ったのだが、鈴木氏が検討した神宮文庫本『よはのねざめ』は中村本の巻二に該当するもので、その他の巻については『狭衣物語』の影響について具体的な検討はなされていない。本稿は改作本全体を視野に入れて、『狭衣物語』が改作の要因として働き、改作の構想に影響を与えたということについてみていくものである。

### 三 改作要因に関しての従来の説

『夜の寝覚』の改作の理由や目的について、これまでには次のような考え方が提示されている。

①金子武雄氏(古典文庫『夜寝覚物語』下)解題 昭和三十年一月

読者層の変化により、古典作品も簡略化、通俗化の必要が生じたため短編化をはかった。

②松尾聰氏(『平安時代物語の研究』東宝書房 昭和三十年六月)

原作現存部までを正編、末尾欠巻部を続編とし、続編を削ることで男女両主人公の恋愛譚として短編化を志向した。その際、『無名草子』の寢覚上の偽死事件への非難に応じたものと思われる。

- ③ 鈴木一雄氏（『神宮文庫本「よはのねざめ」について』『国語』三一 昭和二十九年四月）

原作の簡略化、平易化が目的だが、②の説を肯定しつつ、『無名草子』を見ていたかどうかの判断は保留し、原作への積極的批判的改変を行っているとする。（藤田徳太郎氏の鎌倉時代の物語改作における説に基づく。「鎌倉時代の物語」『国語・国文』昭和十二年十月）

- ④ 鈴木弘道氏（『中村本 夜寝覚物語 卷一に於ける改作について』『論究日本文学』四 昭和三十年十一月）

②の説の正統編説を受け、両編とも主題は天人の予言の実現という点で一致しており、「夢はむなしからぬ事」を言おうとする目的のためには、正編だけで十分だから、続編を削って短編化した。故に、寢覚上の偽死事件を削ったのは、『無名草子』の非難に応じるためではなく、短

編化のために自然消滅したのである。

- ⑤ 永井和子氏（『寝覚物語の研究』笠間書院 昭和四十三年七月）

原作の梗概化を進めていった改作者が途中で原作のテーマの読み違いを起こし、短縮化をはかるために幸福な結末の物語へと変えてしまった。改作の途中で構想を変えた。

- ⑥ 久下裕利氏（『変容する物語―物語文学史への一視角―』新興社 平成二年十月）

④⑤説を否定し、②を補正。中村本の改作は、寢覚上の幸せな物語に質的変貌を遂げることと同時に、短編化への志向もあったのであり、その逆ではないはずである。

改作要因について『無名草子』の『寢覚』評に応じたか否かという論争もあったが、概ね①から⑤までは原作の短縮化を図ることが第一の目的であったとする説である。しかし、⑥に挙げた久下氏は、短縮化よりもまずは質的変換を目的としていたはずだと述べ、そのため前もって構想は立てられていたと言う。

本稿は、この久下氏の主張と同じ立場に立つものであり、原作を質的変換させるきっかけを与え、そしてその変換のための構想に大きく関与していたのが『狭衣物語』であるということ論じるものである。また、改作要因として『無名草子』の『寢覚』評が関与したか否かについては今は触れず、『狭衣物語』が改

作要因として働いたという点的を絞って論じていく。

#### 四 改作要因として働いた『狭衣物語』

##### 1 冒頭部における主人公像

改作『寢覚』の女主人公は、概ね原作での人物像を引き継いでいるが、物語冒頭部において、原作には見られない表現を付与されて登場してくる。つまり、改作者が意図的にそのような表現を女主人公に添加したということを示しているのだが、その改作者の意図を読み解いてみたい。

その添加した本文を次に引用してみる。

①（父親）「我が子にあらじ。天つ乙女などの、仮に宿り給へるにや」と、なよ竹のかぐや姫のこともおぼし出でられ給ひて、うつくしき御かたちありさまにも、「目見入れきこゆる物やあらん。いとこれほどなくても、などなかりけん」とまでぞ、おぼし嘆きける。（改作『寢覚』巻一・三三二頁）

右に挙げた文章は、女主人公が二年続けて天人降下の夢を見たあと、三年目の八月十五夜に、期待していた天人は夢に現れなかったので、「口惜しくて」歌を詠み、琵琶を弾いていると、

父の大臣がその音色のみごとに驚くという内容の、原作と同じ筋をたどったあと、改作本が独自に挿入した文章である。

原作のこの場面では、女主人公の弾く琵琶の音色のみごとに父親が「めづらかに、ゆゆしくかなしと聞きたまふ」とあるだけで、傍線部のように「天つ乙女」や「かぐや姫」を想起したり、娘の容姿の美しさに言及したりすることはない。

さらに、点線部「目見入れきこゆる物やあらん」に呼応させたかのように、次のような表現が、改作時に補入されていることに気づく。

②おとと君のさばかり沈みて、やせ給へるが、ひきも縊ひ給はぬは、言ひくらぶべくもなく、「かやうにおはする、いかなる悪しき物の見入れたるにか」と見あさまる心地して（改作『寢覚』巻一・三四三頁）

これは、男主人公とあやにくな契りをもった女主人公が懷妊し、まるで重篤な病に陥ったかのように衰弱しているのを見て、何も知らない兄弟達が、点線部「いかなる悪しき物の見入れたるにか」と不安がる場面である。原作のこの場面では、女主人公の装束や容姿の描写があり、兄弟や父親がその美しさに感動するということだけが表現されており、「かやうにおはする、いかなる悪しき物の見入れたるにか」に該当する表現は見当た

らない。

つまり、この②の点線部「いかなる悪しき物の見入れたるにか」は、①の点線部で、女主人公のあまりの美しさ故に「目見入れきこゆる物やあらん」と恐れていたことが現実になって、女主人公に「悪しき物」が見入ったために、これほどひどい状態になったのだと対応させているとみることが可能であり、こういった対応関係が改作者によって新たに創出されたのだと言えるのではないだろうか。

では、何故、改作者はこういった対応関係を創出し、また、①に見られるような「天つ乙女」や「かぐや姫」の話題を添加したのだろうか。その答えを導き出すヒントは『狭衣物語』の中にある。

まず先に、「天つ乙女」「かぐや姫」について述べてみる。

『狭衣』の主人公は、類稀な美貌と才能を持った人物であるが、物語冒頭部でそのことが、天人が天下つたのではないか、という表現で繰り返し言われている。そして改作『寢覚』の①の傍線部「天つ乙女などの、仮に宿り給へるにや」に該当するような表現がみられるのである。

次にその本文を引用してみる。しかし、ここで、『狭衣』の伝本の多さが問題となろうが、本稿では、とりあえず通行本に

よって考察することとし、『狭衣物語』の伝本のうち第三系統本を底本にする、新潮日本古典集成『狭衣物語』（上 昭和六十年三月、下 昭和六十二年六月）の本文を引用する。また、第一系統本を底本とする、新編日本古典文学全集本（小学館 ①平成十一年十一月②平成十三年十一月）を参照し、大きな相違がある場合のみ注記した。<sup>(13)</sup>

### ③『狭衣』巻一

大殿などは、あまりゆゆしく、「天稚御子の天下りたまへるにや。今日天の羽衣迎へきこえたまはむ」と、あやふく静心なき御心のうちどもなり。

新全集本では、右の箇所該当する表現は次のように異なっている。

「大殿、母宮、いとあまりゆゆしう、危ふきものと思ひきこえさせたまへり」

そして、集成本の表現に該当すると思われる表現がこの場面以前にある。

「母宮などは、天人などのしばし天降りたまひたるにやと、恐ろしう、かりそめにのみ思ひきこえさせたまひて」

この表現は、集成本にはない。

集成本の引用箇所は、主人公の父親が、我が子の琴笛の腕前の尋常でない様や、魅力的な容姿・振舞に対して、天稚御子が

天下つたのではないかと思ひ、ならば天上から迎えが来るのではないかと恐れているという内容である。新全集本では天稚御子という語はみられないが、父親の代わりに母親が「天人などのしばし天降りたまひたるにや」と恐れ、「しばし」とあることから、やがて天上に帰っていくことが予期されることを踏まえての表現と考えられる。

このことから、『狭衣』において、主人公は、親から、天人が天下つたもので、やがて天上に帰ってしまうのではないかと恐れられているという表現があつたものと考えられる。そしてこのような主人公像が『寢覚』の改作者によつて取り入れられたのが、①の傍線部「天つ乙女などの、仮に宿り給へるにや」と「なよ竹のかぐや姫」のことを思ひ出したという表現であつたと考えられる。

ここで、『狭衣』の「天稚御子」又は「天人」が、『寢覚』では「天つ乙女」と変化したのは、『寢覚』の引用本文直前に主人公が詠んだ次の歌の影響であろう。

A 天の原雲の通ひ路閉ちてけり月の都の人も訪ひ来ず

これは、『古今集』の遍照の歌、

B 天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ乙女の姿しばしとどめむを踏んだ歌である。Aの歌は原作にもあつた歌をそのまま使つ

たもので、改作者はAの歌からBの歌を連想し、その中の「天つ」「乙女」を用いて、『狭衣』の男主人公に対して用いた「天稚御子」又は「天人」という表現を、『寢覚』の主人公が女であることから、「天つ乙女」に変更したと思われる。さらに、『狭衣』の本文③の「天の羽衣迎へきこえたまはむ」という表現（新全集本では、この表現がない）、或いは、Aの歌の点線部「月の都の人」という表現から、『寢覚』①の「なよ竹のかぐや姫のこともおほし出でられ」という表現は出てきやすい。

このように、『狭衣』の本文③の「天稚御子の天下りたまへるにや。今日天の羽衣迎へきこえたまはむ」という表現が、改作『寢覚』の本文①の「我が子にあらじ。天つ乙女などの、仮に宿り給へるにや」と、なよ竹のかぐや姫のこともおほし出でられ給ひて」という表現を生み出したと言えよう。

では次に、女主人公に「悪しき物」が「見入った」ために重病に陥つたという対応関係について、『狭衣』の別の場面を引用して、やはり、『狭衣』の主人公像が改作『寢覚』の女主人公像に影響を与えていることについてみてみる。

④『狭衣』巻一

月も疾う入りて、御前の燈籠の火ども昼のやうなる灯影に、かたちはいとど光りまさりて、柱に寄り居て、まめやかに

わぶわぶ吹き出でたまへる笛の音、雲居をひびかしたまへるに、帝をはじめたてまつりて、九重のうちの賤の男まで聞きおどろき涙を落さぬはなし。五月雨の空のもののむつかしげなるに、「物や見入れたてまつらむ」とまでゆゆしくあはれに誰も御覧するに、(中略)げに、「月の都の人もいかでかはおどろかざらむ」とおほゆるに、衆の声々いとは

近うなりて、紫の雲たなびきたると見ゆるに、びんづら結びて言ひ知らずをかしげなる童の、装束うるはしくしたるかうばしきもの、ふと降り来るまゝに、糸遊か何ぞと見ゆる薄き衣を、中將の君にうち掛けて袖を引きたまふに、我もいみじくもの心細くて、立ちとまるべき心地もせず、

(中略)御顔は、天人のならびたまへるにもほひ愛敬こよなくまさりて、めでたき御声して誦じたまへるに、天稚御子涙を流したまひて、かう何事にもこの世にすぐれたるにより誘ひつれど、ことわりにめでたうかなしき文の心ばへによりとどめつる口惜しさを作り交して、雲の興寄せて乗りたまひぬる名残のにはひばかりとまりて、空の気色も変はりぬるを、「あさましなども世の常のことをこそ言へ。めづらかなり」と、見る限りは夢の心地したまひけり。

これは、端午の節句の夜、主人公が宮中で笛を吹くと、その

みごとに音色に、人々が「物や見入れたてまつらむ」と不吉な思いをしていると、それに呼応したかのように「天稚御子」が天下つてきて主人公を天上に連れ去ろうとしたという場面である。ここでは、主人公が天稚御子によって地上から連れ去られようとしたのは、人々が恐れていたように「物」が「見入った」ためだと解釈できるような表現がなされている。

そしてこの場面の、「物」が「見入った」ために不吉なことが起こったという対応関係が、改作『寝覚』の引用本文①と②の点線部の対応関係を生み出したと考えることができるのではないだろうか。先に、改作『寝覚』の女主人公が、『狭衣』の主人公に倣つて、天人が天下つたのではないかと表現されているということがあった。改作『寝覚』の女主人公に、そのような『狭衣』の主人公との共通点が作り出されているということから考えて、主人公に「物」が「見入った」ために凶事が起こるという対応関係についても、『狭衣』から改作『寝覚』への影響があったとみてよいと思う。

さらに、改作者が原作になかったこういった対応関係をわざわざ新たに付け加えたのは、『狭衣』のこの場面が強く印象付けられていたためだと思われる。そのことを物語るように「天稚御子」という言葉が改作本中に見られ、これは原作の中間欠



巻部に当たするため、原作との比較はできないが、おそらく改作者の創作箇所と考えられる。

⑤ (老閨白) 「こころ見し人など、これほどは思ひ寄るべきに

あらず。並べたらんに、悪しからずおぼゆるばかりの身にもがな」と、あらぬ世に生まれてさらに見る心地し給ひて、「天稚御子なりとも、これほどはありなんや」とおぼすに、

(改作『寢覚』巻二・四三頁)

女主人公が老閨白と結婚した時、老閨白が始めて女主人公の顔を見た場面である。女主人公の美しさに驚いた老閨白が傍線部のように女主人公と「天稚御子」とを比較している。

そもそも、天稚御子というのは『狭衣』の本文④の波線部にあるように「びんづら」を結った姿であることから男性であったはずで、改作本のように女主人公の美の比較対象として用いるのには違和感がある。改作本でそのような表現をした原因を考えてみると、『無名草子』に『狭衣』の「天稚御子」を「天の乙女」と表記していることから、この頃にはその性別があいまいになっていたのかもしれない。或いは、永井和子氏の言うように、「天稚御子」が男女の性差を超えた美しい者として認識されていたために、改作本で女主人公の比較対象として用いられたのかもしれない。<sup>14)</sup>

そのような事情があるにせよ、改作本で女主人公の美の比較対象に「天稚御子」が用いられたのは、『狭衣』の引用本文④の中の傍線部「御顔は、天人のならびたまへるにもにほひ愛敬こよなくまさりて」の影響があつたのではないだろうか。但し、新全集本、第二系統の伝為家本を見ると、この傍線部の表現はないことから、必ずしも『狭衣』の伝本全てに共通する表現ではなかったようだが、集成本のように、はっきりと主人公と天稚御子とを比較した表現はなくとも、天稚御子降下の場面は『狭衣』の中でも特に印象深い場面であつたため、少なくとも、改作本で女主人公が天人以上の美しさだという時、『狭衣』の天稚御子をもってきたのだということではできそうである。

以上、改作『寢覚』の女主人公に原作にはなかった新たに付加された表現が、『狭衣』の主人公に関連する表現を利用したものであつたということを検討してきたわけだが、改作者はなぜそのような手を加えたのだろうか。原作に新たな表現を付加せずとも、女主人公の美しさとすばらしい楽才は十分伝わるはずなのに、それだけでは、満足しなかったのはなぜなのか。そこに改作者の改作に向かった要因を探ることができるように思われる。

つまり、『寢覚』の女主人公に『狭衣』の主人公に関連した

表現が付け加えられているという現象は、改作者が『寢覚』の

女主人公を『狭衣』の主人公に近づけようとしていたことを意味するのではないだろうか。そのように解釈することができる根拠は、この二つの物語に主人公の楽才による天人降下という現象が描かれ、いわば、音楽奇瑞譚としての共通点があったという点に求められる。天人降下に着目した改作者は、『寢覚』の女主人公を『狭衣』の主人公と同一の属性を有する人物として明確に表現し直そうとした。その結果が、『寢覚』の女主人公に『狭衣』の主人公に近づくような表現が附加されるという現象になったとみることができる。改作者は、『狭衣』と『寢覚』の主人公を、天人が天下ったと思われるほどの楽才と美貌を備えた人物として捉えたと考えられる。つまり、彼らを、天人降下を引き起こすほどの楽才と美貌という、同一の属性を有する主人公として、それぞれの物語の中に位置づけたのだと言える。

そして『寢覚』の主人公が、『狭衣』の主人公と同一の属性を有する人物となった時、そこではもう原作の女主人公の人生は放擲され、新たな女主人公の人生が開かれることが約束されていたはずである。そしてそれは当然、『狭衣』の主人公の人生に歩み寄ったものであるはずだ。

## 2 結末部における主人公の幸

では、『寢覚』の女主人公の新たな人生とはどのようなものと想定されたのだろうか。それを知るには、当然、改変された女主人公の手本となった『狭衣』の主人公の人生について検討すべきであるが、狭衣の人生の姿は、原作『寢覚』の女主人公の人生と比較することで明確になると思われる。そしてそこから、『寢覚』の女主人公が新たに歩むべき人生の姿が見えてくるはずだ。以下、そのような道筋で論を進めていく。

原作『寢覚』では、女主人公は男主人公の妻とはなるが、正妻女一の宮がいたことで幸福感は得られない。また、二人の間の子供が中宮にはなるものの一家の繁栄が約束された大団円で終わらず、彼女の苦悩の人生が続くやがて出家し死んでいったようだ。一方、『狭衣』では、主人公は理想の女性である源氏の宮を妻にすることはできなかったものの、その形代の女性（式部卿の宮の姫君）を妻にし夫婦円満な生活を得、やがて帝位に付き一家の繁栄が約束されて終わる。こうしてみると両者の人生は正反対の方向に向かっていると言える。

但し、『狭衣』については、主人公の理想の女性への不毛の愛を軸にして展開される愛の悲劇が描かれているといつたよう

な見解が一般的である。だが、『源氏』の「紫のゆかりの物語」に相当する「式部卿の宮の姫君」の物語を巻四に配し、光源氏が准太上天皇に至る、いわゆる第一部（桐壺から藤裏葉の巻まで）の大団円に当たる狭衣帝即位で物語を終えていることから、巨視的には『源氏』の第一部の世界に重なるといった見解もある<sup>(16)</sup>。巨視的には『源氏』の第一部の世界に重なるといった見解もあり、音楽奇瑞に着目した音楽繁栄譚として捉えることのできる面がある。『寝覚』の改作者は『狭衣』をそのような繁栄譚物語として解釈したと考えたい。

ところで、前述したように、これら二つの物語はどちらも冒頭部で天人降下という奇瑞が描かれているのに、それぞれの物語の主人公達は、結末では正反対と言っているような運命になっ<sup>(17)</sup>てしまっている。冒頭部での音楽奇瑞に対応させるならば、結末は当然『狭衣』のように大団円で終わっていなければならぬはずだ。その点において、原作『寝覚』の結末は冒頭部と対応していない。つまり、原作は最初から音楽繁栄譚として成り立っていなかったということなのである。

『寝覚』の改作者は、その矛盾を解消しようとしたとみることができ<sup>(18)</sup>る。天人降下が描かれていた『狭衣』をみた時、同じく天人降下が描かれている『寝覚』において、その主人公の首尾一貫しない人生を正そうとしたのではないだろうか。それは、

満月の夜に見た吉夢による靈験という面からも正されねばならなかつたわけで、音楽繁栄譚と吉夢靈験譚という二つの面から、当然女主人公は大団円の結末を迎えるべきなのであつた。

そこで、具体的にその指針を与えたのが『狭衣』の主人公であつたということができ<sup>(19)</sup>る。つまり、『狭衣』の主人公の結末に倣つて、『寝覚』の女主人公も、理想の相手と夫婦円満の幸せな生活を得、一家の繁栄が約束されるという結末を迎えるように改変しようということになつたと考えられる。そして『寝覚』をこのように『狭衣』と同じような結末の物語にするために、改作者は『寝覚』の女主人公を『狭衣』の主人公にできるだけ近似させようと考えた。その結果、先に1で述べたように、女主人公には、父親が、天人が天下つたのではないかと不吉があるという表現と、またその美しさゆえ「物」が「見入る」ことになるという対応関係が付加されることになつたのである。『寝覚』の女主人公を『狭衣』の主人公に近づけるような創作がなされた背景には、以上のような改作者の意識が働いていたと考えられる。このように改作者の意識の中で、二つの物語の主人公は、天人降下を引き起こす楽才と「物に見入られる」ほどの美貌とを具備した、この世で最高の幸を手に入れるのにふさわしい人物として設定されたのである。

『寢覚』『狭衣』という二つの物語に共通する天人降下に着目した時、これら二つの物語における主人公達の結末の不統一は、一方の物語の結末を他方に合わせるという改作を促し、また両物語の主人公達が同一の属性を有する人物として設定し直されるという改変につながっていったと考えられる。改作『寢覚』の女主人公が『狭衣』の主人公と同じような榮才と美しさを有する人物として表現し直されているという現象をこのような意味に捉えた時、『狭衣物語』は原作『夜の寢覚』の改作要因として働いたと言えるのではないだろうか。

〔注〕

(1) 国宝『寢覚物語絵巻』は大和文華館に、『夜寢覚抜書』は大阪青山短期大学に所蔵されている。

(2) 藤岡作太郎著『国文学全史 平安朝編』(岩波書店 大正十二年一月)の緒言は明治三十八年九月である。

(3) 上巻は昭和二十九年十一月、下巻は昭和三十年一月に刊行された。

(4) 永井和子著『寢覚物語の研究』(笠間書院 昭和四十三年七月)第三章第一節や、古典文庫『夜寢覚物語』下巻の金子武雄氏の解説による。

(5) 『無名草子』『拾遺百首歌合』二十番石『寢覚物語絵巻』詞書などの資料によると、物語の終盤には女主人公は出家し、同じく出家していた冷泉院と歌の贈答などもあるが、決して幸せな結末を迎えたとは言えない内容である。

(6) 河添房江氏は、中村本を「夢により構造的に変換を遂げた作品」とし、女主人公の見た天人降下の吉夢を起点として彼女の繁榮譚を貫くところに中村本の面目があったという。(『体系物語文学史三』『中村本寢覚物語』有精堂 昭和五十八年)また、石埜敬子氏は、「原作『寢覚』は、序・跋によって形成された改作の枠内にはめこまれ、座談の場で話題に上った「実夢」の一例証に過ぎない存在となるのである」と述べる。(『中世王朝物語を学ぶ人のために』『改作本『夜の寢覚』を中心に』世界思想社 平成九年)

(7) 擬古物語に『狭衣』が大きい影響を与えていることについては、例えば次のような指摘がある。

『兵部卿物語』…文辞の酷似、重層的構造の類似。(片岡利博「『兵部卿物語』の構造―『狭衣』『小夜衣』との比較を通して―」『語文』三十五 昭和五十四年四月)

『小夜衣』…本文をほとんどそのままの形で受け入れている。(三谷栄一『物語文学史論』有精堂 昭和二十七年)

五月)

『あきぎり』…露骨に『狭衣』の詞章をとりこむ、『狭衣』の引歌をそのまま取り入れる。(妹尾好信『あきぎり』引歌表現考)『広島大学文学部紀要』五十五 平成七年十二月)

『苔の衣』…執拗に『狭衣』を引用しつつ別種の物語に交換した。(山田和則『苔の衣』成立論—改作仮説と二条太皇太后宮令子サロン—)『国語と国文学』平成十六年十月)

『石清水物語』…上巻の歌は源氏・狭衣の影響。(山森雅樹)(以下二作品については、『研究資料日本古典文学①物語文学』明治書院 昭和五十八年九月 の解説による)『いではしのぶ』…冒頭部の描写、人物設定に『狭衣』の影響。

(神野藤昭夫)

(8) 『神宮文庫本『よはのねざめ』について』(『国語』第三巻第一号 昭和二十九年四月)

尚、神宮文庫本とは、三条家旧蔵本の巻二のことであり、巻一、巻三は宮内庁書陵部にある。

(9) 改作本の序の起筆部「紫藤の露の底の花の色衰へ、翠竹の煙の中に鳥の声も稀になりゆけば」は、源相規の詩句「紫

藤露底残花色 翠竹煙中暮鳥声」(『和漢朗詠集』上「春藤」)に拠るということ、中村本の頭注書入れにある。(永井和子著『続寝覚物語の研究』第二章の三。笠間書院 平成二年九月)。また、『狭衣物語』の起筆部「少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ」は、白居易の詩句「青燭共憐深夜月 踏花同惜少年春」(『和漢朗詠集』上「春 春夜」)に拠る。

(10) 改作本の本文引用は、『鎌倉時代物語集成 第六巻』所収の『夜寝覚物語』(笠間書院 平成五年五月)に拠るが、私に漢字を当て、仮名遣いや句読点も改めた。以下、改作本の本文引用はこれに同じ。

(11) 三谷栄一著『物語文学史論 新訂版』(有精堂 昭和四十年十月)「第三章 物語の崩壊」の「二 読者と改作」参照。

(12) 原作『寝覚』の本文引用は、新編日本古典文学全集『夜の寝覚』(小学館 平成十五年七月)に拠る。

(13) 『狭衣物語』の伝本については、新編日本古典文学全集『狭衣物語』①の後藤祥子氏の伝本解説に拠った。ここでは、第二系統本は第一系統本を元に大きな書き直しをし、第三系統本は第一、第二系統を折衷しつつ第一系統本に付くことが多いと解説されている。また、三谷栄一氏によれば、第一か

ら第四系統の本文すべてがすでに鎌倉初期には出現していたらしい。(『狭衣物語の異本成立とその時期―巻一を中心として―』『国学院大学紀要』第七卷) この稿ではその本文比較

をする場合、通行本では、新潮日本古典集成本と新編日本古典文学全集本に拠るのが適当と考えた。なお、冒頭部の天人に例えられている主人公像、及び宮中での天稚御子降下場面の表現については、次の本文も検討してみた。第二系統本文を、『狭衣物語諸本集成2』所収の「伝為家本」で、第四系統本文を『日本古典全書 狭衣物語 上』(朝日新聞社 昭和四十年)で確認したところ、集成本とほとんど同じ表現であった。

(14) 注4の永井著に同じ。

(15) 新編日本古典文学全集『狭衣物語』②の小町谷照彦氏の解説。

(16) 新潮日本古典集成『狭衣物語』下の鈴木一雄氏の解説。

(17) 河添氏は、冒頭部での天人による秘曲伝授という筋は、音楽繁栄譚となるはずだが、原作ではその神話論理がびび割れており、中村本はその論理によって音楽繁栄譚としてよみがえったという。(注6の著)

本稿は、長らく手元にあった平成十八年提出の修士論文を今夏漸く改稿したものである。御指導を頂いた田中登先生、山本登朗先生に深く感謝致します。

(おだ まさえ／大阪府立豊中高高等学校講師)